

キーワード19 自己開示

ある日、Rさんがクラスで粗相をした。クラス中が「何だこのにおい。」と騒ぎ出した。担任のS教諭が、Rさんを連れて保健室に行き着替えさせたが、Rさんは動こうとはせず「教室には戻りたくない。」と言った。

そこでS教諭は、Rさんにこんな話をした。「実はね、先生も二年生のとき、おもらししてしまったの。どうしても先生に言えなくてね。すごく恥ずかしかったの。そのときの気持ちは、今でも覚えているよ。」

その話をきいたRさんは、ボソボソと「前にぼくが男子トイレの大の方に入ったとき、からかわれたから、言えなくて我慢してたんだ。」と話した。

何とかRさんを教室に連れて帰ったS教諭は、子供たちにRさんの気持ちと、誰にも失敗はあることを話し、自分も同じことをしていつまでもみんなに言われ、つらい思いをしたことを話した。

すると、今まで騒いでいた子供たちの中から、「実は…私も…」といった発言が出始めた。



この事例では、担任が人には言えない自分の経験を子供に話しています。Rさんは、担任の経験を聞いて安心し、勇気付けられ「前にほくが…」と、話せるようになりました。教師の率直さが、Rさんの心を開きました。

子供が求める教師の自己開示

子供たちは、「先生はどう思っているのですか。」「先生のことを聞かせてください。」と教師の感じていること、失敗や子供のころの経験など、教師自身の事を知りたがります。それを知るにより、教師を身近な存在として感じ、安心して自己表現し、自分の本当の気持ちを話すことができるようになるのです。

「ごめんなさい。」と率直に

日々の学校生活で、子供と教師の間で誤解が起こることがあります。「間違っただけ。」と気付いたら、躊躇することなく修正する勇気が必要です。教師も子供も、お互いに自分の誤りを認め合うことで、子供と教師の関係が深まります。

「自己開示」は、正直・率直・誠実・かくしだてのないという言葉で表すことができます。しかし、自分のことを何でも話せばよいということではありません。安易な自己開示は、子供から信頼を失うことにもつながります。子供とのふれあいを深めながら、しっかりとした考えをもって、実行することが大切です。